
このたび異世界に就職しました

loi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

このたび異世界に就職しました

【Nコード】

N6558Y

【作者名】

l o i

【あらすじ】

不景気の今現在、欲に駆られうつかり異世界に就職してしまった私を笑うがいいさっ！雇用主は女神様。自分の失敗なら自分で何とかすればいいのに……。仕事内容は消滅してしまいそんな魔族の王国を立て直してあげてって。無理っすわ。当の魔王は臆病でヘタレだし戦火を生き残った（らしい）人たちも性格に難があるし。私にいたってはただの農業高校の三年生だし……。

高三、就活中

さて、ここに一枚の履歴書があるのだが。そうそこです名前の欄を見て欲しいのだ。

『――』

さあ何と読むでしょう？

正解はその直ぐ上の点線で区切られたほっそいフリガナを見ていただきたい。

『ニノマエ イチ』

ニノマエまでは仕方ない。テストのときにとても時間短縮でとてもいいのだが。両親。なぜ名前まで横棒一本にした。しかもイチって何だ。せめてハジメとか人間の名前らしいのが良かったのに。

ちよつと変な後輩には『ふたつちゃん』なんていうあだ名をつけられた。

ぐしゃりと履歴書を握り潰す。

名前のせいではないのだが、このイライラをどうぶつければいいと
いうのですか。こちとらこれで三社めですよ。

落ちたのが。

もうね、不景気なのはね、分かっているんですけどね、どうもね、
遣る瀬無いね。

高校3年で就職を選んだのは半分。そのうち内定を貰えたのは三割。
もちろんあたしは内定を貰えない7割のほうですとも！

うふふ。何かもう何でもいいや。えり好みしないから、何でもこ

いやー求人！！！！

農高の畜産科で学んだ人間はある程度のこと耐性があるあるのさ
ふはははは！！！！。 ああゝ虚しくなってきたよ。

いや、でもマジで何でもいいんだよ。。。そこは本当。

学校の進路指導室で書き写してきた求人のメモプリントをガサガサ
と引っ張り出す。

おや？

見たことの無い文面。字はあたしの字に間違いないのだが。。。。
不思議に思いながらも、その内容にテンションが直角90°位の斜
面並みに飛び上がった。

終焉

清々しい程の、青空。

通り抜けるのは心地よい季節の穏やかな風。この暖かな時期特有の自然の草木の好い匂いまで含まれている。

なんて皮肉だろう。

この昼を過ぎたばかりの気候は平和と呼ばれるものに相応しいものだろう。

そう。確かにこの場に居る殆どの人間にとっては今この瞬間は平和を勝ち取った瞬間なのだろう。

しかし、僕達にしてみたらこの瞬間は破滅そのものである。

視線を上げれば、ほんの少し前に陥落した王城のバルコニーに並んだ首を見上げて、さらに絶望感に発車がかかる。思い出したように、きな臭い匂いが澄んだ空気に混じって漂ってくる。

「コーリエ・・・コーリエっ!!」

高笑いを上げなら、まだ敵に切りかかろうとしている上司に声をかける。後ろから羽交い絞めにしてやっと少女の姿の上司もようやく、この国の終焉を見上げた。

「う、そ・・・」

両手に握られた大斧が滑り落ち、血をすい赤黒く湿った大地に突き刺さる。ポツポツと点在する僅かな仲間達も呆けたように、上を見

上げ武器を落とす。

高い所に掲げられた首の数を思わず数えてしまう。
並べられた頭に共通する、青い髪。顔立ちもよく似た首が4つ。

ああ、、、

この国に残されていた王族の子供達の全て。本当に終わりだ・・・。
思わず地に膝をつく。

「兄さまっ」

小さく、少年の声が聞こえた。数人の兵に凶器を突きつけた青い髪をした少年がバルコニーに現れた。遠くても確かに見開かれた瞳と震える細い肩が確認できた。

やがて、残った者達に降伏するよう、大人しく従う様にとの酷く高圧的な大声が響く。

そんなこと言われなくとも、戦意など全く無い。周りの敵もそれを感じ取っているのかももう僕達に武器を向けようとはしない。

コーリエが大きな瞳いっぱい涙を溜めていた。やがてそれは溢れて零れだす。飛び散った返り血と交じり合って赤い涙が流れる。

「アルっ！」

歓声を上げ勝利を喜ぶ敵兵の間を、何故か侍女の格好をした少年がこそこそと駆け寄ってくる。よく眺めて特徴的な瞳と髪を認識して名前を呼ぶ。

「よかった！生きてたんだなっ！？」

少年はスカートの裾を掴んだまま息を弾ませて小声ながらも厳しい

声で言う。

「良くないっ！殿下を押さえられたんだぞ！！あとコーリエ、とつとと城に戻って血を拭いて兵士の名簿全部消去しろ。それで出来るだけ綺麗な服着て、名前だけの將軍だと言え！あの糞共が理不尽な条約吹っかけて来る。早くっ！」

コーリエが、頷いてこそりこそりと離れていく。
その背中を見送りながら呟く。

「今更なにやっただって無駄だよ・・・」

「この馬鹿！これからもつと大変な事になるだろうが。人間どもは共通の敵を倒す為に団結してただけだ。もうその敵はいない。今度はやつ等が喰い合う番だ。魔族の兵力と、土地、資源！今こんな状態なのに、これ以上搾取されて堪るかっ、これ以上僕達のもの戦乱に巻き込まれて堪るかっ！！」

怒鳴った奴も泣きそうな顔をしていた。

相変わらず、穏やかな天候でその場にいる殆どの人々が喜びを満面に広げ歓声を上げる中にポツポツと絶望に満ちた少数派はただ項垂れるだけだった。

墓穴（ガチで死体を埋める穴）からのスタート

さっくさっく。

ばさばさばさ。

さっくさっく。

ばさばさばさ。

何でしょう。この慣れ親しんだ土の香りは。

しっとり湿つばい土の香りが濃く匂っている。そして徐々に体の上に圧力が増えていく。押しつぶされそうな感じは無い。ちょうど良い、安心感の沸くような圧力。

でもどんどん増しているのは確かなので、手遅れにならないうちに状況確認をしましょう。

よっこいせと、上半身を起す。

「何だこれ!？」

私は穴の中におりました。

そして腹の上に土が乗っている。ちょっと上の穴の出口からまだ少量づつ土が振ってくる。

これはアレですか、墓穴ですか？

「ちょっとまってー！生きてる生きてるっ!!！」

え、みたいな呟きが聞こえて穴を覗き込む顔があった。青空をバツクに覗いた顔にぽかーんとする。

あれは生物がもつ色じゃない気がするのだが。

アレですか、DANの操作がなんたらですか？

「ホントだ・・・動いてる」

そうこぼしたの20代後半くらいの男。

何故か髪は背景の青空の色を反射しているのか、妙な色をしている。光ファイバー的な物で出来ているのだろうか・・・。それに目はシヤボン玉色だ。よりするに虹色瞬きする度に、くるくると色合いが揺れる。

しかもおつとりした、いい感じのイケメンである。

ぽかーんと見上げる私の前に手が差し出される。

「一人で出れないでしょう？」

慌ててその手を掴む。

ひょいっと墓穴の外に持ち上げられる。

「いや、申し訳ない。倒れているし、脈はないしで死にたてか何かだと思つて、暇してたものだから埋めて置こうかと・・・」

「生きているんですけど」

そう不機嫌に呟いて目の前の男をしらじらと眺める。

なんつーファンタジー臭い服装でしょう。ちよっぴしヨーロッパの貴族のよな格好である。ただし、装飾はなくあっさりとした簡素な印象を受ける。

さらに、腕まくりをしていかにも重そうな鉄のスコップのようなものを持っている。

「おかしいなー確かに、脈が無かった様な・・・？」

すいっと腕を持ち上げられて脈をとられる。自分でも嫌な予感がした。抑えている指にも脈拍は伝わるだろうが、抑えられた腕だってどくどくと圧迫されるのを感じる。

「やっぱり、無いんですけど」

男が呆然としたように、腕を掴んだまま呟いて、急にキツと視線を強める。

「お前は、確かに、人間、だよな・・・？」

口調が厳しくなるが、私はそれどころではない。

突然見ず知らずの土地の墓穴で目覚めたって、体色がUAM的なにーちゃんに出会ったて私は驚きませんともっ！

だってしぶしぶ、嫌々ながらも事前に説明を受け、了承だっとして
いる。

ただ、ただ、これは聞いてない！聞いてないぞ！！

脈がないってなに、死んでるの？でも確かに私は意識はあるし思考
もしているし・・・。

「聞いてないっ！！！」

思わず叫んで、掴まれていた手を振りほどいて両手でぺたぺた自分の
体を改める。

首筋に手を当ててみる。ほんのさつきまでと一緒で温い。でも脈拍
は感じない。なにこれ気持ち悪い・・・。

「だ、大丈夫なのか？」

気づけば、妙な色を持った男がしゃがみ込んだ私を見下ろしている。
一拍前までの冷たい敵意の様なものは無い。

「大丈夫じゃない、ちょ、待つて、今整理する、落ち着く。え、なにがどうなった訳？契約違反？よく思い出そう・・・」
独り言をぶつぶつ呟いてから、少し前の記憶を手繰り寄せる。

テンションはただ上がりしたが、やっぱりそのメモに見覚えが無い。
読んでみれば、条件が低くて得るものが異常に多い。なにこれ、映画みたい。超高額の報酬に釣られ参加するが隔離され、れつつすげーむ！みたいな。

あれ、じゃあこれもやばいんだろうか？
いやいや、現実にそんなもん「ありませんがな。それにメモには気になる一文。赤ペンでぐりぐり囲われて、

『帰ったら即電話』

横には携帯の番号のような数字が並んでいる。でも、本当は学校を通して連絡しないといけないんだよねーだけどこれどう見ても自分の字だし・・・。

えい、電話しちまえ。

こんなもん面接じゃない

発信ボタンを押した瞬間、辺りは真っ白になった。

一瞬、なんぞ！？

とおもったが直ぐに景色がしっかりする。脳みそに像が結ばれる。

「！？」

その映像はさつきまでいた居間ではなく、どっかの応接室のような場所だった。私はすっかり応接セットのソファアの上に座っている。携帯にぎったまま。

「えーでは、貴女が二ノマエ、イチさんですね」

「あ、はい！県立中央農業高等学校畜産か、っては！？なにこのノリ、って言うか誰ですか！？」

目の前にテーブルを挟んで女の人が座っていた。

しかもものすごい絶世の美女！・・・格好はみょうちくりんだが。国語で、漢文の勉強をした時に先生が配った資料集のコピーに載っていたような中国のお姫様。そういった格好。着物に似ているのがもつとゆったりして帯に美しい飾りがついている。黒い長い髪にもきらきら飾りがついている。

「面接官ですよ？」

当たり前のように言うが、普通の企業の人とはそんな格好していません！なんだお前、コスプレか？

「え・・・まあ、コスプレも時々するけどこれは勝負服です！神様の威厳を出したい時にきます。普段はもっとラフです」

「それは失礼しました」

・・・・・・。

「神様っていった！？しかも人の脳内覗き見た！？」

「そう神様だよ！頭の中ぐらいいえるよ！！でも、叫ばないで耳痛いよ！！」

2人(?)してテーブルを挟んで身を乗り出して大絶叫。そして沈黙。今気づいたがテーブルの上にはお茶まで出ていた。

よしし落ち着け私、そう落ち着こう。神様たつてこの日本のお国には800万位いるらしいじゃない。総理大臣よりなれる確率高そうじゃない。議員さんより多いじゃない。学校の先生より多い？じゃない。

「落ちつたかなあー？いいかなあ？」

この事態をすっかり受け入れて認識は出来ていないが、とりあえず心拍数は下がったぞ。

「はいじゃあ、早速お仕事の話しますねえー。イチさんにはあたしの創った世界に行ってもらって、ぼろくそに惨敗した弱小国家の復興をお願いしますねえ」

「・・・・。あの、神様ってのはなんかもー認めますけど、日本の何か神様じゃないんですか？」

私は少なからず非現実的な現象に影響されているようだ。
根本的に間違った質問をしている気がする。

「うん。元々はねえ。でももう必要とされなくなっちゃたから。そのまま消滅しても良かったんだけどね？せつかく神様なんだし、お役目もないしいかなあーって思っって一個世界創っちゃった」

そんなテへ、見たいな顔で途方も無いこと言わないで。
ふう、と息をはいて超お美しい神様は独白のように続ける。

「この国を見つめてる時にねえー人間って不便ねえーって考えてたの。それでね、自分で世界作ったときにちよつとづつ変わった便利なことが出来るヒト達を混ぜたの。全部じゃないよ？全員できたらそれを便利と思わないし、あんまりにもバランス悪いものねえ。だからそのヒト達はホントに少数なの。・・・あたし忘れてたんだあ、人間って異端を嫌うのよね。世界が回りだしたら力を持ったヒト達は差別されだしてねえ。きつとみんな怖かったの。力を持ったヒト達は確かに周りに比べて強い生き物だったけど。圧倒的に数が少なかったから。いつも追いやられてばかりでね」

本当に悲しそうな顔をする。

「追いやられた人たちがね、何とか寄り集まって自分達の所属する社会を作ったんだけどねえ。それさえも怖がられてみんな敵対しちやった。数百年はぎすぎすしながらも何とかやってたんだけど、とうとう戦争が起きちゃった・・・。確かに優れた力を持った人たちだったけど、本当に小さな小国と全世界。あつさり負けちゃって。今は本当に可哀想。あたし、そんな風に創っちゃったものとしては、心苦しいのねえ」

神様なら自分でいくらでも好きなように書き換えられそんな気がするんですが……。

「それは駄目。それこそバランス悪くしちゃうからー。でねえーあたし考えてねえー。この世界の元締めつばい神様に『人間もらっていい?』っていったら『いいよー』って」

最後あたりから急に声のトーンが上がる。

「で、適当な人のところに求人潜らせて置いたら貴女から連絡きましたー。わーい。大丈夫書いてあったとおり衣食住問題なし!必要な物は値段に関らず進呈するからねえー!しかも無制限!!すてきだねっ」

そうだね、プロテインだね。

「じゃ早速ですが、あちらに出勤してねえ」

「いやいやいや!しませんよ!?私がアサハ力でした、真面目に就活するんでなかった事に。っていゆつか勤務地は明記して」

「ぶー」。だつてえ、ただでさえ得点だらけで怪しいのにつその上『勤務地 異世界』なんて誰も応募しないじゃないつ。せつかく来たのに逃がしてたまるかぁー!ねーウチで働いてよあ。求められて働く何て最高じゃない」

「でも異世界って……そんなもん通えないでしょ、下手したらお正月もお盆も帰れないでしょ!両親に悪いでしょ!」

「それはもちろん、帰れないけどお。でも大丈夫！この世界から貴女の痕跡は記録からも記憶からも物質からも抹消しておくからね！誰も困らないし心配しないね！親切だねっ」

「親切違うから、私が困るから」

「ええでも、ココに来た時点で快諾してくれると思ってもう消しちやった」

「なにしてんのあんた！？てへじゃないだろ！！何で快諾するとおもうの！？」

ぜーぜーと肩で息をしながら、一息に叫んだ。

こんな大声張り上げるのは体育祭と仔豚の脱走騒ぎの時ぐらいだ。怒声を上げられた神様は、瞬間、きょとんと固まってぶわっと泣き出した。

「だ、だってあたしの世界の中の人たち・・・可哀想なんだもん。あ、あたしが魔族だけ助けたら人間が可哀想なん、だ・・・。いまさら大きく変化を起こしたら・・・うう、あたしが悪いのは分かってるけど神差は手出しできないんだもんっ、お、お願いだよー見捨てないでよお、本当に困ってるのお。貴女は困った女神様と世界一個見捨てるような薄情なのー？」

うう、神様とか世界とか以前にこんなしくしく泣かれると良心が・・・。

しかも私の存在消去済みだと？言い方からしてもう戻せそうにはない様だし。

えぐえぐと泣いている神様をしばし見つめてから、考えをまとめて

告げる。

「分かったよ。行くよ。上手い話に良く考えないで食いついた私の自業自得でもあるし、でも本当に私の周りにいた人には迷惑からないんだね？」

「いえあー！その点は絶対大丈夫だよつ。あ、ちなみに向こうはは発展上のもろもろで何故か和風に成らなかつたの、不思議だね！中世よーろつぱを見たことないけどそんな感じだよつ。きつと！なので言葉も文字も文化も違うけど、その辺はあたしが適当に補正するね！やったね！イチさんの初出勤だねおめでとうだね、でも帰宅はしないねけどねえ。じゃあ行つてらっしゃい。あ、忘れてた！移行中めまいや吐き気、もろもろの不都合が起こる場合があるけど気にしちゃいけないよ？ゲロ袋はあげるねえ。今度こそ行つてらっしゃいっ」

ぴつたり泣き止んで超いい笑顔でまくし立てたと思ったら、神様は袖の中からホイッスルを取り出した。
そしてちょぴり悔しそうな顔をして、

「本当はゆびぱっちんしたいんだけど、千年以上練習しても今だにできないんだあ」

お姫様のような格好に似合わない、黄色いプラスチックの笛をくわえて神様は、ピーとお吹きになったわけだが。
その瞬間私の周りには全部闇に落つこちたわけで。
遠くのほうから、ウザイ神様の声が聞こえた。

「ゲロ袋と鍵、忘れ物だよあ」

ゲロ袋はいらねえーよ！

墓掘り男の住処

「不都合ってこれ!？」

頭を抱え込んでほんの少し前の事を回想した結果、自分なりの答えを導き出した。

不都合どころか、命のもんだいなんですけど。あのやろーあんだけへらへらと軽く言いやがって。

「もう問題ない？」

おっと、横に変な色の男が居る事を完全に失念してわ。

さっき睨まれた気がしたけど今は時に気が立つてる様には見えない。

「問題だらけだけど、落ち着いた・・・」

「君はあれだよな、間違いなく人間だよな？」

「そこは大丈夫間違いない」

「普通脈が無い人間はいないよな」

そうだよなーと私が立ち上がって腕を組んで考え込むと、隣にたった男も首を傾げている。スコップ担いだまま。

何かさつき一瞬怖い人かと思ったが、面倒見のよいい人なのかも知れないな。

でもこの人も人間ばくないよなあ、主に色合いが。

「あ、私も一個確認しなくちゃ」

ココが異世界であろう事は、間違いない様だがちゃんと魔族（？）の土地に『出勤』できたかは謎だった。

この人が全部こんな色合いなのかも知れないし。

「えっとー、あなたはアレですか。魔族？ですか？」

言ってて恥ずかしい。

もう一回墓穴に隠れたい位恥ずかしい。

こっちの心の葛藤お構いなしに、男は遠慮なく驚いた顔をする。やめてください。そんな顔しないでアホ言ったみたいで本当に墓穴にダイブしたい……。

「気づかなかったの？人間のくせに怖がらないなあと思ったら分かんかったってこと？脈も無いし、魔族を怖がらないし、何これ」

「いや、こっちも何これなんだけど」

うーんと、2人でもう一回首を傾げたから、不意に男が顔を近づけてきて、胸に耳を当てようとして直ぐに止めた。

それで凄い失礼なことしようとした……みたいな顔してその体勢のままこちらの顔を見上げる。

「私そういう事、全く気にしませんけど」

ウチのクラスは、はっきり言ってオープン過ぎるから。

「確認してもいい？」

うん。どうぞ。と頷くと、左胸に耳を当てる。目を閉じて耳を澄ませるようにして直ぐに離れる。

「心音もない」

まじっすか……。いや、脈ない時点で予感はあるがな。

「ホントに変な人間だな。よし、ここで悩んでたって答え分かんなくてイライラするから付いておいで。もっと詳しくそんな奴も居るだろうし」

墓場らしき荒地を、何故か手を引かれて歩いている。

なぜ手を引いているんだ……。なんで手繋いでいるんだ？

さっき「付いておいで」で一瞬戸惑ったからか？そりゃ戸惑うよ。

普通知らない人には付いていかないもの。

……。

それにしても私はこれからどうしたらいいんだ？

あのウザ神様は、復興手伝え的なこと言ってたよなー。でもどうすればいいんだろう。本格的に復興政策に関するような事は、そーとーエライ人とご対面しないといけないそうだけど。身分証明も出来ない私はどうしたらいいんだ……。

アレかなーお米の作り方でも布教させればいいのだろうか。そんな感じの手伝いでいいのだろうか？

って言うか、この男はナニモンだ……？

墓守？

技術が低いのか総鉄のスコップを担いでいる。重そう……。

しばらく、ぼやぼや考え事しながら歩いていたらいつの間にか、景色が変わっていた。

街中だ。

いつの間にこんな建物の多い所に来たんだ？

ちろつと後ろを見たら、とーくに長い灰色の線が見える。きつとアレだ、防壁か何かだ。門を潜ったんだろうが、覚えがない。

あれ、そう言えば人が全然見当たらないなあー。

私がきよろきよろしていると、まだ手を引いている男が何かを察し、たらしく注射をくれた。

「まだ早朝だから。．．．人口も未だに戻らないからね」

ぼろくそに敗戦したって言ってたっけ。

っていうか、コイツ、早朝から何で墓穴掘ってたの。軽く寒気がする人だなー。

「すみません、どこ行くんですか？あなたの家この辺ですか？」

歩きつかれた感はずっとないが、風景の変わりようから相当な距離歩いている気がする。

「家っていうか住家はもう直ぐ」

もうすぐって何分くらいまで許容されるんだろう。

「ほらあれ」

ずっと掴んでいた手が離れて、少し小高くなった緑の丘を示す。その丘の上にあるのは、N。Kの番組で拝めそうな、美しく壮大な建物。

ドイツとかに旅行に行つたならできるだけたくさん見て回りたいなあーと思う建造物。

つまりお城。

お城である。

ほんまもんのお城である。

青い屋根と白い外壁、何本かの塔がありそれらの屋根は子供が夢見るような尖つた三角。(円錐っていうけどね)マジで絵に描いたようなおしろじやーヒャッホーイ。

「え、あんたひよつとしてエライ人!？」

「・・・ずいぶん間があつたな。一応エライ人。うん、でもその反応で良かった。心底驚いてるみたいだ。なんか企んでるかとも思つてつたんだけど」

「ああ、驚いたよ。てつきり墓守か、墓掘りか、墓泥棒かと思つたもの」

「僕の第一印象最悪みたいだね・・・」

いやいやそんな事ないさ。

やあでもこれは本当に復興政策に参加しないといけないパターンなのか？

でも普通あり得ないか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6558y/>

このたび異世界に就職しました

2011年11月20日21時42分発行